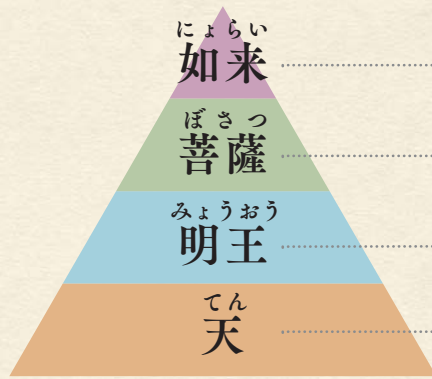


【仏像の種類】



お釈迦様が悟りを開いて得た姿がモデル

主な像 釈迦如来・阿弥陀如来・薬師如来など

王子だったお釈迦様の修行中の姿がモデル

主な像 観音菩薩（聖観音・十一面観音・千手観音）・弥勒菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩など

激しい怒りで煩惱を破壊する密教の仏

主な像 不動明王・愛染明王・降三世明王・大威徳明王・軍荼利明王など

古代インドの神で仏とその教え、信者を守る

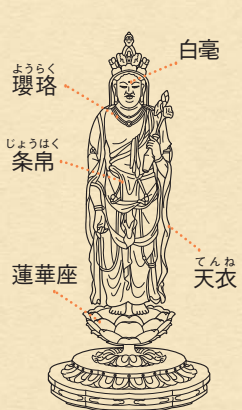
主な像 梵天・帝釈天・四天王・毘沙門天・吉祥天・弁才天・十二天など

【仏像の特徴】



如来

如来（仏・仏陀）は悟りを開き煩惱を断っているため飾り品は身につけていません。頭上の盛り上がり（肉髻）と小さな巻き髪を集めたような髪型（螺髪）が特徴です。



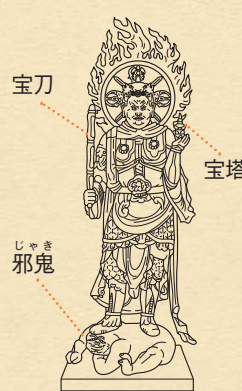
菩薩

王子だった頃のお釈迦様がモデルなので宝冠や瓔珞（ネックレス）などの飾り品を身につけています。多くは広大な慈悲心を表すやさしい表情をしていますが例外もあります。



明王

やさしい言葉や態度では心を改めない者を導き煩惱や悪を打ち破るため強い怒りの表情をし、火焰光背を背負っています。不動明王以外は多面多臂（顔や腕が多い）の像です。



天

天部ともいいます。仏教を守る役目なので鎧を身につけた武人の姿で剣や鉾などの武器を手にしていることが多いのですが、弁才天や吉祥天のように美しい女性の天もあります。

お寺巡りをさらに愉しむ！ 仏像の見方 基本の「き」

お寺巡りの楽しみのひとつが仏像拝観。やさしいお顔や恐い表情、顔や腕がいくつもある像があるかと思えば、子どもを思わせるものもあります。仏像の種類や歴史を知れば、お寺巡りがもっと愉しくなります。

仏像とは何か

仏教もごく始めの頃は仏像を造りませんでした。お釈迦様の姿を彫像にするのは畏れ多いことと思われたのです。しかし、仏教が庶民にも広まるにつれて仏像が造られ、礼拝の対象となりました。

また、極楽浄土へ迎え入れてくれる阿弥陀如来、心身の病を除いてくれる薬師如来など、仏教の救いを具体的に示す仏像の造られるようになりました。インド古来の神々も仏教を守る仏として信仰されるようになり、仏像の仲間入りをしました。さらに、密教が説かれるようになると、すさまじい怒りや神通力で悪や煩惱を打ち砕く明王の像も現れました。仏像は時代によって大きく変化してきました。

飛鳥時代は神秘的なアーモンド形の目が特徴です。奈良時代は自然な写真実、平安時代は貴族好みの穏やかで円満な姿。そして、運慶が活躍した鎌倉時代は、力強く迫力ある像が造られました。このように仏像は、時代ごとの願いのあり方をその姿に表してきました。



毎年4月22日の聖霊会舞楽大法要は一年の行事の中で最も大規模な舞楽大法要。豪華絢爛な絵巻を彷彿とさせる舞楽が鑑賞できます。



毎月2回を目安に、朝6時30分～8時頃まで五智光院にて、精神修養と仏教を身近なものとして感じられるよう座禅の集い（参禅会）を開催しています。

参禅会の参加方法

開始10分前に本坊客殿玄関で受付。参加費は無料で前もっての申込も不要です。日程はHPのお知らせをご参照ください。



亀井堂の経木流しは、亀井堂の霊水で金堂や六時堂、北鐘堂にて回向（供養）を済ませた経木を流せば極楽浄土が叶うといわれます。

また、この地に聖徳太子が四天王寺を建立したのは、仏教興隆や社会事業のためだけでなく、摂政としての立場から護国を考えたものだともいわれています。「当時は四天王寺がある上町台地の西側まで海が迫り、近くの難波津は国際交易の一大拠点でした。そのため、百済や新羅、高句麗など大陸から訪れた訪問者たちに国威を誇示するため、難波津を見下ろす高台に壮麗な大伽藍を建てたのだともいわれています」

境内には聖徳太子の御霊を祀る聖霊院（太子殿）や聖徳太子のご一代の実蹟が描かれた絵伝の壁画を安置する絵堂、大工技術の始祖ともいわれる太子の偉業を顕彰する「番匠堂」などで聖徳太子を身近に感じることができます。太子の命日である4月22日に毎年開催される聖霊会舞楽大法要では、重要無形民俗文化財の天王寺舞楽を披露。また、太子の月命日には「太子忌」が開催され、この日は四天王寺の縁日として広い境内にたくさん露店が立ち並び大阪の風物詩にもなっています。

「また、四天王寺は彼岸の中日に西門の石鳥居の真ん中に夕日が沈む光景が見られることから、浄土信仰とも深い結びつきがありました。今も春と秋の彼岸には、夕日を拜んで極楽浄土を観想する『日想観』という法要が伝統行事として引き継がれています」

長い歴史の間には、昭和9年（1934）の室戸台風や昭和20年（1945）の大阪大空襲など、度重なる戦禍や災害に見舞われ、境内のほぼ全域が壊滅したといわれています。しかし、各方面の人々の協力を得て復興への努力がなされ、現在の建物は創建当時の様子を忠実に再建されています。そして、4年後の平成34年（2022）には創建1400年を迎えるという四天王寺。今後も祈りの聖地は人々の信仰に支えられ、私たちが深い懐で迎え入れてくれます。